

第34号
2012・12・9発行
金光教教学研究所

追悼号

元所長

佐藤光俊師



平成17年4月

本所会議室にて

嘱託

金光和道師

思い出の先に

所長 竹部 弘



本年四月二十九日に元所長佐藤光俊先生が、また六月二十二日に元部長で嘱託の金光和道先生が、御帰幽になりました。お二人とも在職三十年以上の大先輩です。教学研究所を退かれたのも

同じ平成十七年で、金光先生が四月、佐藤先生が六月でした。退職後も、古巣への愛着以上に、研究所のことを心にかけて、祈りをかけて下さいました。本年六月十日発行の「聖ヶ丘」で佐藤先生追悼号を予告しておりましたが、金光先生も併せて特集号を組むことになりました。所内外からご寄稿いただきました皆様には、厚く御礼申し上げます。

私は、昭和五十六年の夏に大学の卒論作成のため教学研究所を訪ねた時、まず幹事の佐藤先生から問題関心を問い質され、その後教祖研究の部室へ案内されました。机の脇棚に小野家資料を並べた金光先生もおられました。その日が教学研究所並びに両先生との出会いでした。

佐藤先生については告別式で弔辞を述べさせていたいただきましたので、ここでは割愛しますが、一言しておかねばならないことがあります。弔辞のなかで、「この道の先輩が若き日に自らを省みた『教師でありながら信者ですらない』という自戒の言葉」と述べた「言葉」は、厳密には「思い」とすべきでありました。これは、私が研究生の頃、当時高橋正雄師の研究をしておられた佐藤先生のゼミで聞かされた印象深い言葉でありま

したが、紀要論文(「高橋正雄における信仰的自覚確立への過程について」第二三号)を見る限りでは、高橋師自身の言葉と言うよりも、高橋師の「思い」を受けとめた佐藤先生の言葉だからです。しかしまた、その言葉は、佐藤先生が研究を通して出会い受けとめた、高橋正雄という人と信心そのものの表れでもあったと思います。そして、私が最後に病床でお会いした時のお姿は、右論文中で触れられている、高橋師が佐藤照師から受けた「信心は自分の力ではできないものではない」という教導を反芻するかのようであり、若き日に教学で求められたものが生涯の終わりまで生き続けた賜物との思いを禁じ得ません。

金光先生は「小野家の人」でした。課題意識を先立って資料から事実を丹念に掘り起こしていかれました。基本的な事実関係については、まず先生に確認するのが常で、今になって「これを聞いておけばよかった」「あれも聞いておかねばならなかった」と思うことしきりです。先生は、譬えて言えば、大建築の設計技師よりも、瓦一枚・柱一本に精魂こめる職人に徹し、時間の風雪に耐える研究を残されました。私が研究所に入ってすぐの頃、何かの席で「自分にはなっていない」「欲しくない」と言われたことがありました。曰わく言いがたい葛藤を漏らされたのでしょうか、先生には目の前の資料から「教祖とその時代」への坑道を掘り進む探求心があり、それが独自の批判精神となり、研究の隠れた牙ともなっていたと思います。

入所時から同室の大先輩でしたので、平生のゼミや調査・出張から、日常的な四方山話・諸々の遊び事、宴会で掃除機の延長管をトロンボーンのように演奏する

特技に至るまで思い出は尽きませんが、先生がお亡くなりになってじんわりと思い出されたのは、助手になって一年目の研究報告検討会の日のことです。検討会後の夕刻、部室で飲みながら話が続いていました。検討会で、ある所員から「ナンセンスだ」と指摘された箇所について、先生は、「ナンセンスというのは、言う人にセンスがないということ、あなたにはセンスがあるんじゃない」と、ユーモア混じりながらも、いつになく熱っぽく言われました。初めて研究報告の検討を受けた新米助手への一時の慰めというよりも、いよいよ本当のところはやってみなければ分らないし、やってみる者にしか分からないという、体験と信念から出た言葉であったのでしょうか。この発言以上に心に残るのは、先生が一足先に帰られた時のことです。部屋のドアを押し開けて、もう暗くなった室外へ向かう後ろ姿を見送る時、ゴーツという響きを聞いたように感じました。その日、先生は体調が悪く午前中はお休みで、午後からの検討会に出てきて下さいました。優れぬ体でお付き合い下され、二月の寒風吹く夕闇を帰って行かれる姿を予想しながら、風の音以上のものを聞いていたのかも知れません。このことは、個人的な感傷に留まるものではありません。もち

ろん私自身は恩義に感じて思い起こすことですが、しかしそれはまた、教学研究の御用に与る者として、研究と人によって鍛えられ、研究と人に受け継がれていく、自然で当たり前な催しの表れであったのだと思えてなりません。

(姫路西教玄)

研究所入所時の写真から

金光和道師

昭和四五年六月一日入所



佐藤光俊師

昭和四七年六月一日入所



佐藤先生を偲んで

教壇でたばこをふかし
ながら教政を論じました

北堀教会 福嶋義次



思えば、私が光俊先生に書いてもらうのが、順当なのであるが、私が彼の追悼文をここに

書き綴らねばならぬはめになっていること、どうも、人間心では訳が分からんこととの最たるもの一つであろう。愚痴っぽいことは止して、あるエピソードを紹介して、追悼文としよう。

学院に入らず、直接研究所へ入りたいと光俊君が自ら名乗り出、研究生となられたのが、昭和四七年六月一日のことであった。当時、「金光教徒」編集長であった、父君の昇先生がどんなにそのこととて喜ばれ、神様に御礼もうされたことか。彼はその時期、それに気付いたであろうか。

研究生としての研修の一環として、ある日、私は、自分の担当している学院特科(大学卒のクラス)の授業の一コマを彼の講義に任せることにした。あらかじめ

めクラスの学院生と密かに話し合い、教卓にタバコと灰皿、ライター、そしてオールドのボトルとグラスを調べてもらっていた。

神聖な学院の教室の教卓に置かれた場違いな品々と、教壇に立つ彼がどのような関係を結ぶか、それらを無視するかせんかは、私にとっても、学院生にとっても極めて興味深いことであった。光俊先生はそのとき教師でもなく、学院生でもなく、学園闘争を経験してきた学究の徒であった。ということは、学院の諸々の修行にともなう規制からは、部外者であった。たとえ部外者であっても、関わった場に一応は敬意を表し、場がほめかしてくる枠組みから逸脱しないように心得るのが常識的な人間であろう。

その頃、私は、信心の既成概念・信念などを、教学研究の方法論上どこまで突き崩せるか、ということに取り組んでいた。教祖没後、本教の歴史上の既成観念に乗っかるのではなく、それらを取り外し、突き崩しつつ、素顔の教祖にたどり着く可能性があるかないか、を求めていた。

さて、教壇に立った光俊君は、学園闘

争の中を突き抜けてきた経験から、教務
 教政の問題点など述べた、と思うがさだ
 かではない。というのは、その時間、私
 にとつて彼の話の内容よりも、学院の教
 室にあつて、教卓の上の、その場にふさ
 わしくない品々と彼はどのような関係を
 とるかが関心事であつたから、話の内容
 は二の次であつた。

二十分過ぎた頃であつたらうか、彼は
 教卓上のタバコを取り、ふかしながら白
 墨を持って黒板に向かつていった。教室
 には、彼のハスキーヴォイスが、両切り
 のピースの香りに包まれて漂つた。その
 とき「修行の場が穢れた、耐えられぬ」
 という意味の言葉を残して、学院生が一
 人、教室を後にした。彼はその学院生の
 言動を気にも留めず、自論を展開して
 いった。

一時、教室の中がざわついたが、彼の
 話は続いた。タバコの煙が彼の内面から
 の語るべきことを次々と引き出したかの
 ようであつた。私はひたすら何も言わ
 ず、語る彼を注視しつづけた。

一時間の授業は、タバコ二三本煙りに
 して終わった。彼はボトルには手を出さ
 なかった。任された時間、存分に語れて

満足であつた。授業に似つかわしくな
 い品々について、どうして教卓に置かれ
 たか、彼は一言も私に質問しなかつた。
 気をまわさねばならないことよりも、自
 身なさねばならぬことに時々刻々の命を
 賭す、そのような姿があつた。信心の既
 成概念・観念などのブリコラージュは、
 彼には必要なく、直ちに研究に入れるこ
 とを彼に見た。

時は流れ、私たち夫婦は彼の仲人を父
 君昇先生から依頼された。お相手は、あ
 のタバコ授業に、たしか出席されてい
 た、棚橋文恵さんであつた。そうして
 数々のすぐれた彼の教団史論文に出合え
 ることとなつた。顧みれば、彼の諸論文
 は、教団史というより、本教教政学の
 新しい分野を開く諸論文であつたかと
 思う。

教学研究所所長、そして総長時代の光
 俊先生は、学院の授業でタバコをふかし
 ながら語り続けた、あのひたむきな、そ
 して一人わが道をゆく姿勢の延長線上
 で、信心を求めつつ生き切られた、と信
 じている。

(元所長)

佐藤光俊先生を偲んで

新見教会 山田實雄



佐藤光俊君(本
 来なら「師」と呼
 ぶべきだろうが、
 当時のことなの
 で君と言わせて頂

く)と再び出会つたのは、研究所の面接
 の時だつた。学院同期の早川公明君、重
 松信行君と共に臨んだ面接の場に彼も居
 たのだ。彼は私の二年後輩で、東京寮で
 同じ釜の飯を食つた仲だつた。寮時代、
 どういう訳か私は彼から、寮の在り方
 や、寮生の問題などで、これでよいのか
 と何度も詰め寄せられ、一直線なその人間
 性に、尻込みもし遅しさも感じていた。
 その彼が、なぜ、今この場にいるのか。
 不思議に思い尋ねると、彼は、卒論を
 敢えて出さず、学生の立場のままて研
 究生を志願して来たことが分かつた。こ
 こから研究生の同期としての歩みが始
 まつた。

彼にとつて「研究生」は、これから自
 らが歩むべき道を見極めていく大切な時
 間としていたのだと思う。早川公明師が

「お別れの言葉」で述べているように、
 「発言が過激で辛辣、同僚たちの心を容
 赦なく揺さぶり、ニヒルな異端児」と思
 えるほどに自らを問ひながら模索し求め
 ていた時期であつた。彼に、「教外の立
 場で、道の在り様を批判し糾弾しても、
 それは力あるものにはならない。内にあ
 り、教師という立場で、教団の歴史を担
 うという視座に立った上での研究こそ、
 意味を持ち、力あるものとなるはずだ」
 などと言ひ、学院入学の決意を促したこ
 とが忘れられない。特に彼は、加法教会
 は「芸備の脇柱」という御父上佐藤昇先
 生の思いを重く受け止め、大切にしてい
 た。それを知つた私たちは、特に教団史
 研究を進めるには、道の教師となつて己
 が求める道を進んでほしいと迫つたり、
 語り合つたりした。検討会では、諸先
 輩から共に打ちのめされ、その度に大
 酒を飲み、自説を披歴し、又議論を重ね
 ながら、助手になり、やがて彼は、悩ん
 だ末に学院に進み、再び研究所に戻つて
 きた。

その後の研究活動は、鋭く迫力があ
 り、誰もが知るような成果を次々とあげ
 た。私は、七年で研究所を辞したが、そ

の後も芸備の手續に繋がる関係もあり、特に信頼できる友として親しく思っていた。時折、電話があり、諸問題を語り合った。

所長という大役を全うして研究所を去

ることになった時、私は、次のステージでの彼の活躍を期待し、喜んだ。が、ある日、ごく近い先輩の先生から電話があった。「光俊先生が教務総長を受けた」と聞いていたが、本当か」と。寝耳に水の私は、完璧なまでにその噂を否定した。なぜなら、彼の持論は、教学者は教務教政に携わるべきでないというものだったから。その数日後、光俊師から、話があると電話があった。教務総長を受けたなあと直感すると同時に、これまで自説持論を揺るぐことなく貫いてきた彼が、今、何故かと、腹が立ってきた。

加法教会に直行し彼と対面した。自らの体のことへの思いを超えて、並々ならぬ決意で受けたことが伝わってきた。芸備の脇柱としての意識が、芸備の手續の枠を超えて、お道の脇柱として、教主金光様の御取次の脇柱として、佐藤範雄先生がそうであられたように、真に人が助かる教団、組織を更に求めて、深化して

いくべく、命を懸けているなあと感じ、体を大事にするようにとしか言えなかった。結局、教会でじっくり御用に当たる間もなく、教団という大きなステージに立ってしまった。

御葬儀の数日後、彼の友人、今北正史君からハガキをもらった。「光俊が電話で、『山田のじっちゃんかね、時々遊びに来て、子供のことや、いろいろ話していくんだ。いろいろおもしろいんだ。』と。私はたまにしか会えなかったけど、光俊とは先月半ばまでメールのやりとりをしたり、見舞ったり（三月末）。学生会で仲良くなつてからは仲人を頼み：子供のことを本部広前にお届けしてもらい・・・。光俊は私の青春そのものといつてよいでしょう。実ちゃんのお顔を見て、ほっとした終祭でした。仙台に戻つても、まだボーツとしています」と。一読して、「しまった」と思った。総長就任後は、多忙な毎日であるし、体のことも考え、意識的に遠慮していた。そんなことならもつとお邪魔をして困らせてもよかった、もつと楽しんでもらえばよかったですと悔やんだ。よきライバルであり、よき友を失ってしまったが、師の教

蹟を辿りながら御霊となった彼と語り合っていた。

(元所員)

お尋ねしたかったこと

札幌南教会 西川 太



乃神大祭の時でした。

私が佐藤光俊先生御帰幽の報告を受けたのは、四月二十九日、夕張教会天地金お直会がほぼ終わりの時であったと記憶しています。

とつさに「こうなつてはいけないから」と思いました。こうなつてはいけないと思ひ、その立場の先生に「二期目の推薦をしないで下さい」とお願いしたことがあったのです。佐藤先生は、神様の思召しと思われたら、自らのご体調を顧みてもなお、道のために二期目をお引き受けになると思っていましたので、お願いしました。

そのことが杞憂ではなくなつてしま

ました。とても残念です。

○

いつの年であったか忘れましたが、佐藤先生が所長在任中の頃のことです。御本部にお参りした折り、研究所にお邪魔したことがありました。当時、事務長は堤先生でした。同期の気安さから、事務室で堤先生と雑談しておりました。そこへ佐藤先生が来られて、話の輪に入つて下さいました。

その時、先生は、研究所の然るべき立場に立つた者が教務教政の責任ある立場に立つことには、きわめて慎重であるべきだ、という話をされました。

わたしは、十分にお役に立つことができませぬでしたが、戦後の教団史に目を向けておりましたことと、(研究者は誰もがそうだと思いますが) 教務論に関心があったことから、先生のお考えはまったくその通りと思ひました。人事に関してそのあたりが曖昧になると、信心の自己吟味・自己批判を担う機関としての性格に、多年の間には多かれ少なかれ影響してくるものがあると思われました。

その先生が何年かして、教務総長をお引き受けになりました。自らの信心の筋

を曲げる先生ではありません。学生会以来四十年以上のつながりですから、よく分かります。お引き受けになるには、よほどの教団事情とそれを見る「自身の見方があったもの」と思われます。

○ 退任されたら、そのことをお尋ねし、教団の現況、先生の見られる戦後の教団についてお話を伺おうと思っておりました。教学の眼、教政の眼を兼ね備えた貴重なお話を聞かせていただくことができずにはずです。

そのことが、かなわなくなりました。その意味からも、まことに残念です。わたしは、葬儀に会葬できなかつたので、この秋の大祭にお参りさせていただいたとき、横山先生のご案内で加法教会にお参りさせていただきました。御霊前、奥城で「祈念させていただきます」ことができました。

御広前の後ろの長椅子に、母上が座っておられました。加法教会の御広前が、そのまま生きたお姿になっていると思えました。お気持ちはいかほどであるかと思われ、言葉に詰まりました。

(元部長)

「馬鹿」から「ゴー・トゥ・ガイ」へ

サクラメント教会 大矢 嘉



佐藤光俊先生は、英語で言うところの GO-TU-GUY だ。

「頼りになるヤツ」という意味だが、実際にはこころ一番という大変な局面で、万難を排して投入する最後の切り札的な人を指す言葉だ。本教を「全体的総合的」ととらえることのできる数少ない人だからであろう。しかもその中心がブレない。以前、先生に「研究所の紀要を全て英語に訳したい」と話したことがある。その時、本人に言えなかつたのが、「光俊先生の論文によく出てくる『：的』という四文字を超える熟語をどう訳したらいいのか」ということである。

「全体的総合的」も英語にしにくい。「広範囲にわたり包括的に捉えてみて」とでも訳せばよいのだろうか。教祖百年の翌年、昭和五九年二月から研究所で教典の英語への素訳作業に途中から加えていただき、八月にはⅡ類、翌年の一〇月にはⅠ類を完成し、本部当局へその素訳を提出するまでの一年九ヶ月

の間、研究所でお世話になった。凄まじい方々に囲まれた研究所での刺激的な日々を忘れられない。原文の意味がわからなくなると、その分野のエキスパートに尋ね回った。日本語に関する質問以外は、ほぼ教祖か教義に関するもので、教団史に関するものは皆無だったと思う。そのせいもあってか、教団史研究の第三部は、他の部にない得体の知れない不気味さを持った集団のように見えた。その中に、ひととき存在感のある光俊先生がおられた。

先生に初めてお会いした時の第一声が、「どうしたん」だった。

私はこの言葉に面食らった。しかしその言葉を発したときの声の響きに、ぬくもりを感じた。ひとの心にスツと入って来て、単刀直入に「何があなたをそうさせたのか」という驚きと、その裏に「よく来た」という歓迎のニュアンスが込められていたからだ。とてもチャーミングな人だと思った。

研究所で本当に感心させられたのは、何事も徹底的に調査して、実証するということ。そのことは、研究にとどまらない。もう生活、即、研究なのだ。そしていつもその真ん中に光俊先生がいた。

一人が紙繕りを作り始めると、研究所の中でだれが一番いい紙繕りを作れるか

ということになり、研究所は「大紙繕り作り大会」の会場に変わる。もちろん光俊先生の姿もその中であって、強い紙繕りの作り方の研究が始まる。そして、「この紙を繕る方の手も大事なんじゃないやあ、こちらの持つてる方の手をこうやって同時にひねって」と、紙繕り作りの奥義を極めるや紙繕り作りは終了となり、山のように作られた紙繕りが撤収されるのである。

昭和六〇年一月一日、私は、研究所から教庁へ異動になった。その時、送別会をしてくださって、その年の阪神タイガース優勝を記念して、タイガースファンに送られてきた応援ありがとうと書かれた電子メールに、研究所の先生方が寄せ書きをしてくださった。その中に「さ」と書かれたメッセージがふるって

「馬鹿たれ！馬鹿たれ！もつともつと馬鹿になれ！！」

ミスター研究所、佐藤光俊先生、ありがとうございました。これからも、もつともつと馬鹿になることをお約束します。

(元囁託)

見識としての信念

静岡教会 岩崎道興



私が佐藤光俊先生（以下、先生とする）と親しく接するようになった

のは、平成七年の日韓宗教研究者交流シンポジウム参加を通じてであった。韓国で開催されたこのシンポジウムへの参加は、その年国際センターで御用するようになった私のはじめての国外出張でもあった。世界布教についても、そして学術研究についても門外漢同然だった私は、約一週間にわたるプログラムの間、他の参加者の後をついてまわっているだけであった。そんな私に、プログラム最後の夜、日本側参加者のとりまとめ役をしていた先生から声がかかった。

「岩崎君、今夜開催される日本側参加者の宴会で司会をやるように」。

なぜ先生がその役を私にさせたのかは分からなかったが、結果として水を得た魚のようににはじけた私の司会は好

評を得て、それ以来日韓シンポの参加者に（別の意味で）認知されるようになった。公式プログラムでは何も出来ない、何も分からない私が唯一そして最大にお役に立てる（？）場を与えてくださったのであった。

このことをきっかけに先生との距離は縮まり、先生は何かと気にかけてくださるようになった。そして私が国際センターの所長になってからも、研究所長という立場から機関の長としてのアドバイスを時折くださったのであった。そんなある日のことだった。教務上のことについて先生と電話で話をしていた時、ある出来事、それも先生への風当たりの強さをともなう出来事への不満を訴えてこられた。その時、私は気安さから「それは先生がこれまであちこちで売ってきたケンカのしっぺ返しを受けているんじゃないですか」と、うっかり言ってしまった。先生は「そうかもしれないなあ」と、若輩の軽言を受け止めてくださった。斯様に、その時の私の先生のイメージは「信念ゆえに人とぶつかる人」というものであった。

その先生が教務総長の重責を負うことになった。その時、先生の思いを聞かせてもらったことがある。

「体のことを考えると無茶な決断かもしれないが、ぼくは金光様を大切にしていきたいんだ。それがぼくの勤めなんだ」と。

それからの先生は、ご承知の通り信念を貫いていかれた。そして今になると、その信念は「教統」ということへの信念であったように思えてならない。その勝手な思いを不躰ながら書いてみる。

教団史研究から「教団」を見てきた先生は、ずっと「道の道たるところ」すなわち「教統」を問うてこられてきたのだと思う。そして、その「教統」ということは、先生の信心のルーツである佐藤範雄先生の「教団」創設の中心テーマでもあった。先生の信心のDNAには「教統」ということが刻まれていたのだろう。

それ故なのか、平成二三年度教師研修会の講話の中で、先生は「現実問題の迫りに対しては、何を失っても貫かなければならない態度」として「此方

は神がちがう」という教祖様の言葉を持ち出され、それを「自己確認、自己示現の言葉」であり「第三の見識」である、として私たちに訴えかけられた。この「第三の見識」を貫かれようとした教祖様の信念的ありようが、歴代金光様にも受け継がれ、それがそのままご神勤のお姿として、先生の目には映っていたのではなからうか。そして、それをもって「教統」と頂かれていたのではないかと、先生亡き後、講話録を読み返しては勝手な推察をしてしまうのである。

金光様のお出ましを頂かれ、本部広前に打ち伏してご祈念をする先生の姿は、教祖様以来歴代金光様が貫いてきた「教統」への信念（まさに見識）を己の信念として内実化していこうとされた姿である。それは教務総長として教主（教統）を補佐しようとする、先生のお道への信念の現れの姿として思い出されるのである。

先生、ありがとうございました。そして再びの軽言をご寛恕ください。

（評議員・研究員）

研究所設立20周年記念総会 昭和49年11月
学院在学中のため黒衣姿で



佐藤先生を偲ぶ

中野教会 河井真弓



今年開催された
た会合に出席し
た時のことであ
る。ある先生か
ら「河井先生は、

女・佐藤光俊ですね」と言われた。その
様に言われて、これまでだったら、「違
います」と迷わず返答しただろうが、そ
の時は、そうかもしれないと妙に素直に
思え黙っていた。その様に仰った先生の
真意は確認していないが、私がそう思っ
たのには理由がある。

研究所を辞め、東京の教会で御用をし

て六年。この間、佐藤先生が研究所時代
に仰っていたことが、事ある毎に思い出
され、その言葉の意味が理解でき、真実
味を増し、深みをもつ経験をしているか
らである。それら佐藤先生の発言の射程
には、「社会の世俗化」と「宗教の世俗
化」の問題があった。前者は、現代社会
において、神々の存在や、その領域、規
範が消え去る問題。後者は、人間中心主
義により神の存在や信心が人間の自己肯
定の道具になる問題である。佐藤先生
は、これらの問題の突破口を探るため格
闘し、金光教内外へと問題提起し続けて
おられた。私も東京へ来て、直面させら
れたのが、「社会の世俗化」と「宗教の
世俗化」の問題であった。そして、この
問題を乗り越えるべきものと対峙した瞬
間から、佐藤先生の言葉が私の中に響き
渡りだしたのである。佐藤先生の立ち所
と問題の仕方が、私にも分かりました。

界のものである。研究所長時代の業績で
ある、『金光教教典用語辞典』の編纂、『教
団史基本資料集成』などの教団史資料の
渉猟・踏査、ご専門の教団史研究をふま
えた『金光教の歴史に学ぶ』の執筆、東
アジアの近代という問題を見据えた上
で、異文化、諸学問、他宗教などの対話
と学びの場を構築した「日韓宗教研究者
交流シンポジウム」「教団付置研究所懇
話会」の発起など、佐藤先生の誠実な姿
勢に牽引されて着手し、成し得たものと
思われる。いずれも、これらを着手する
に当たっては相当な覚悟を要する上、本
教史はもとより、東アジア及び日本の歴
史、宗教を問う諸学問などへの広範な知
識が必要であることは言うまでもない。
その上で、これらのプロジェクトを通し
て深められ、磨かれていった信心の見識
と洞察力こそが、佐藤先生の様々な発言
の基底にあることを理解しなければなら
ない。

俗化」の二課題を克服できると考えた。
それは、「金光教における超越性とは何
か」「信心に超越性を如何に回復するか」
という課題を孕むものでもある。続い
て、「神が助かる」信心へジャンプする
跳躍板に、新たな運動まで用意した。そ
して、ご帰幽なさった。
私も、運動を跳躍板に信心の稽古中
だ。中でも「神のおかげに目覚め」とい
う箇所は、明治六年の御神伝の「天地の
間に氏子おっておかげを知らず」と通
底している内容で重要だと考え、取り
組んでみて、信心が大きく展開しだし
た。今まで見えていた信心の景色の違
いに自ら驚いている。この跳躍板のお
かげで、金光教という大きな信心の姿
が分かりました。
八月末のある夜、信心が世俗化に侵食
されている現実を考え、寝付けないで、
うとうとしていると、夢の中に佐藤先生
が出てきた。満面の笑みで私を見ている
のだ。何も言葉はかけられなかったが、
「もつと頑張れ！頑張れ！」と言われて
いるような、その嬉しそうな顔は忘れら
れない。

(元所員)

「で、何が分かったんや?」

第三部部长 児山真生



私が入所した平成七年、佐藤光俊先生は研究所長だった。以来、先生には、所長と職員（助手・

所員）の関係の中で、さらにその後も折々に、引き上げていただいた。その先生から聴かせていただいた名言・金言（時に迷言・珍言も）は数多い。

その中で、研究生入所式所長挨拶の際、しばしば用いておられた「分かる」というのは、こちらの生き方が変わることである」が深く印象に残っている。佐藤先生はこの言葉を研究所の先輩から教わったと仰っていた（もう一つ、「人間は行き詰まることをおして、生まれ変わる」ことができる」も、先の言葉と共によく用いられた）。

私が助手の頃、第三部室と所長室は隣り合わせだった。そのこともあってか、佐藤先生はよく第三部室にやって来られた。時折、部員一人ひとりの机を回遊し

ながら、「論文には日本語を書けよ」、「パソコンは研究してくれんよ」等々、チクリと言つて、相手の反応を「愉しんで」おられたことを思い出す。いじられないよう気配を消している末席の私にもやがて、「何をし・よ・る・ん・や?」。しどろもどろに答えていると、「で、何が分かったんや?」とさらに質問される。「分かる」ということを「生き方が変わる」ほどのことと仰る先生から「何が分かったんや?」と問われれば、「生き方が変わる」ほどの内容を返答しなければと、当時の私は本気で思っていた。とはい

え、そのような思っけても、実際には答えられる内容がなく、返答に窮するのが常だった。一方で、質問意図を曲解していたにせよ、「で、何が分かったんや?」と尋ねられることによって、自ずと目の前の取り組みを見つめ直させられる経験もした。

その後、本所が日韓宗教研究者交流シンポジウムの日本側事務局を担当していた時期、主査として所長室へ相談に行った際や、同シンポジウムの運営委員会へ随行する道中など、佐藤先生と一対一で接する機会を通して、少しずつ先生の意

図を理解するようになった。私の知る先生は、〈前提的なもの〉に対して鋭く反応され、ことのほか厳しい態度で臨まれていたように思う。主査案件の相談で伺つて、うっかり「これまでどおり…」などとわきまえたようなことを言おうものなら、「それはどういうことか!」とピシヤリ。案件そっちのけで、態度や考へ方の問題を論されることもしばしばあった。

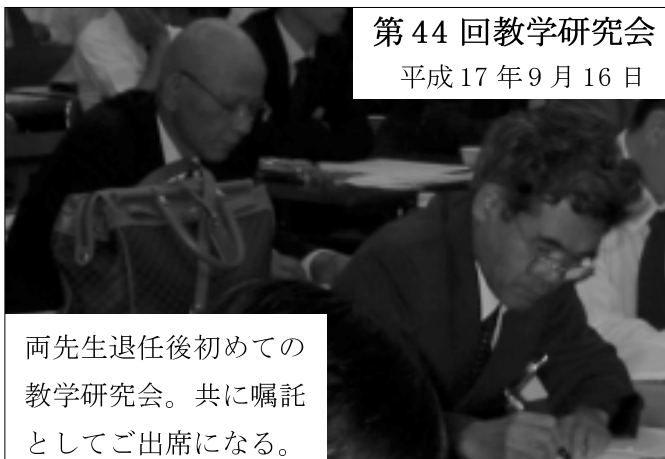
先生といえば、例年の研究生入所式等の挨拶原稿を毎回新たに用意される方だった。その先生が、同じ言葉を何度も用いられたということも、私が印象を深くした一因だったように思う。思い返せば、先生はその言葉を、新たに迎えた研究生に向かって語りつつ、自らへ向けておられたように思う。それだけ先生にとつても思い入れのある言葉だったのだろう。先生にはいろいろとお尋ねをし、丁寧にあくさんのことを教えていただいた。ただ、この言葉についての先生の思いは、何かはばかられる気がして、お尋ねせぬままになっていた。いつの日にかとも思っていたが、かなわぬことになってしまった。

けれど、今でも、研究や生活の上で思うに任せないでいる時、どこからともなく「で、何が分かったんや?」と先生の生々しい声のままに響いてくることがある。そして、「先生ならば…」と考えれば、自ずと、前提の問題へと意識が向くようになった。佐藤先生のあり方を通して、「こちらの生き方が変わる」ほどの契機が、身近にあることを教わってきたのだと思う。

(佐馬地教念)

第44回教学研究会

平成17年9月16日



両先生退任後初めての教学研究会。共に囑託としてご出席になる。

金光先生を偲んで



研究風景
昭和61年5月

金光和道先生のこと

牧野教会 早川公明



金光和道先生は、私が第一部(教祖研究)に配属されて以来、退職するまでずっと同

室で、兄貴分として公私にわたり、大変お世話になった。

和道先輩は、研究所員のなかでも少し特異な存在であった。大先輩達が多くいたが、彼は、古い地方文書や「御伝記奉修所」時代に集めた資料についてのエキスパートと言ってよく、『小野家文書』の

解説・編集をはじめ、教祖研究のための背景となる基礎資料の整理に意欲的に取り組み、とにかく時間さえあれば、それらの資料と睨めっこしていた。そして、

年度ごとの研究報告も、論文の形式で提出するより、古文書解説や資料整理に従事したという報告ですませる場合が多かった。しかし、誰にも文句を言わせないくらい、『小野家文書』の膨大な解説・諸資料についての堅実な押さえ・教典基礎資料の編集に力を注ぎ、皆がその資料

を基にし、彼に資料を尋ねながら、論文執筆に取り掛かれたといつてもよいくらいだった。長期間、紀要『金光教学』に連載された『永代御用記』などの小野家資料や「金光大神事蹟集」、そして教典の『人物誌』も、ほとんど彼の手で成し遂げられた個人的業績だと言える。

そんな先輩の研究姿勢を端的に語ってくれているのは、『教学叢書第1集「教学とは何か」』に掲載されている「素朴な教学者」という一文だろう。その叢書刊行の打ち上げ会るとき、ある部長が、同じ叢書に掲載の私の一文「虚学のすずめ」をあえて引き合いに出しながら、「早川君のも随分奮ったことを書いていて面

白かったが、私やあんたのような研究は、よくもって三〜五年の寿命、十年もすれば問題関心の古臭い過去の遺物だとして忘れ去られる。それに比べると、和

道さんのような仕事は、ずっと価値ある文献として民俗学や史学界からも注目される。しかしまあ、それでいいんだ。自分たちは今閃きがあれば、そこに賭けようなあ」と酔って私に言われ、コップに酒を注いでくださった。その時の話が強く印象に残っている。

当の和道先輩は、研究報告の都度、私に言ったものだ。「公ちゃん、書けん書けん言うてボヤキ続けながら、提出期限になると、ちゃんと出来上がつとる。羨ましい頭脳じゃなあ」。

研究のスタイルは全く別でありつつ、私達二人は実に気が合い、調査出張ともなると、良きコンビで行動を共にした。ある時は墓石調査票を片手に玉島や寄島の墓地を、ある時は今では不可能な位牌や過去帳や戸籍簿を見せてもらいに近隣の寺院や役場を回った。小幡彦助の子孫を訪ねて、コートに身を包み刑事気取りで東京の下街を歩き、私の研究関心に付き合っ

て、吉野・丹生川上社・大峰山・高野山などにも足を延ばした。調査時に携帯するグッズ「元号・年代早見表」「新旧暦対照表」各種便覧の類すべてが先輩の手作りのものだった。

親密さは家族同士にもおよび、夫婦関係や子育てへの注文・愚痴を打ち明け合っ

て家庭のうさを晴らし、「公ちゃんが家族のことを愚痴ると、わしゃあ本当に救われるんじゃないやあ。うちも同じとか、それ以上じゃからなあ」などと、妙に慰められたりしたものだ。そういうえ

ば、ある休日、家族ぐるみで赤穂へのドライブに誘ってもらい、帰りの車中で賑やかなマーチを子供たちと歌いまくったこともあった。

その他、毎月部内で定期的に行われた小野家資料の裏打ち作業や、『覚』ゼミでの検討会、それに毎夏企画された沙美東浜での米鳥賊網漁…。もう何十年も前の懐かしい光景が和道先生や当時の面々の容姿と共に、今も鮮やかに眼前に浮かんでくる。

今度教学研究会に出ても、もうその先輩にお会いできないのかと思うと、何とも淋しい。

(元部長)

両先生を偲んで

佐藤光俊先生と金光和道先生との思い出について

能代教会 荒谷真知子



私が、教学研究
所での事務
の御用をさせ
て頂く事とな
りましたのは、

昭和五十八年であります。まだ、十代であつた私は、別世界に迷い込んだ気さえしておりました。そして、実に個性的な先生方からお声をかけて頂きまして、興味半分、恐怖半分の私に、佐藤光俊先生からもお声をかけて頂きました。しかし、そのお姿に目を奪われ、一瞬、「外国の方？」と頭の中が混乱。そして、そのマスクから繰り出される広島弁に、ただただ圧倒されておりました。あとから他の先生に「金光町のアラン・ドロン」と教わり、納得した部分もあり、しかし、アラン・ドロンは広島弁は喋らないなあ、とも思ったり。結局、その時、何と声をかけて下さったのか全く覚えていな

いという始末でありました。

私が入所当時は、光俊先生は幹事の御用をなさっており、程なく部長になられました。様々な文書の内容をお持ちになり、私が、その頃は和文タイプで、しばらく経つとワープロが導入され、文書作成を行っておりました。文書に訂正が入る事もあり、打ち直しの際には、丁寧に説明して労いの言葉もかけて頂きました。

又、ご心ささせて頂く者としての物事に対する取組みや物事の捉え方など、ちよつとした会話の中にもわかり易くお話下さいました。

ある日、教師御帰幽の連絡が入り、玄関前の黒板に記入していたのですが、存じ上げている先生でしたので、チョークを持つ手が震え、書き終えるのに時間がかかりました。その時、たまたま光俊先生が通りかかり、黒板をご覧になっておいででした。私が、手が震えた旨をお話しすると、そういう気持ちは大事にしていきなさいとおっしゃって頂きました。光俊先生が御帰幽になられた日は、私の在籍教会の天地金乃神大祭当日でありました。お広前に座らせて頂き、光俊先生へ御礼させて頂くのですが、御礼がちゃんと御礼になっているのか、大事な事を本当に大事な事として自分の中に

持っているのか、問いかけられている様な気がしておりました。何をしようとじゃ、と笑っておいででしょうか。

金光和道先生との思い出は、ある年の冬の日、金光町に雪が降り積もるといふ事がありました。ご年配の方も経験した事がないとの事で、珍しい出来事でした。所の前庭には三十四センチの積雪。秋田出身の私には冬の雪は当たり前前の光

景ですが、雪とのご縁がない方々は大変なんでしょう。その日、廊下でお会いした和道先生から「あなたが雪を連れて来たんじゃない。あなたは雪女じゃない」と笑顔で言われました。続けて「まだ降りますかな」とおっしゃいましたので、灰色の厚い雲が低く垂れこめていた様に思ひ、まだ降る旨をお伝えしました。そして又、雪がちらちらと落ちてきました。雪の季節になると、この場面を思い出します。和道先生、今度は秋田の本場の雪を眺めにおいで下さいませ。

佐藤光俊先生、金光和道先生、ありがとうございます。ございました。教学研究所での六年間は、私の財産となっております。どうぞ、これからも、お見守り、お導き下さいます様お願い申し上げます。

(元主事)

論文から
語ってこられるようです…

第一部部長 大林浩治



私は、佐藤先生
に教団史研究を指
導して頂いた一番
最後の弟子という
ことになりました。

そして今は、和道先生が指導されていた教祖研究の部署にいます。そんな私が、いま、お二人の論文に目を通しながら、不思議な気分になっています。生身の人としてお会いしたのは現実のことなのに、その現実の方はまるで夢の中のよう。出来事の数々が、論文の中にすつぽり入り込んでしまったような気分なのです。

お二人の研究は、「資料の蒐集・分析・解釈に基づく実証主義的研究方法」というものでしょう。しかし、着眼や着想は、大きく異なっていました。

佐藤先生とは、毎晩と云ってよいほど、お酒を頂きながらお話をさせていたかったです。そんなとき、先生にとつて聞き捨てならない言葉がありました。みなさんもご承知の通り、「世俗」とか「近代」です。それが耳に入ると勝手にスイッチが入ります。「信心が、そん

な世俗的な価値で判断されてよいものか」「近代合理主義は問題だ。それによつて人間は神に対する畏怖の感情を失った」…。これらは、信心の本質究明を大事になされた先生ならではの言です。ご自身の研究から生じたものに違いありません。

それは「擬態論」に窺うことができませぬ。そもそも「擬態」は、本質論を提起するためではなく、「擬態がそのままの事実だ」として初期教団を捉えたものでした。ところが、「擬態論」として方法化され、やがて信心の「正体」＝「本来性」から立論されるように、倫理性が付与されます。教政史の分野に足を踏み入れる以上、それは当然だったと言えるでしょう。

とはいえ一方では、「擬態の事実こそが布教史をつくっているんだ」とも言い続けておられました。それは「正体の見極め」とは別の基準の言葉です。ですから、先生の本質論的な言葉の数々は、あえて選び取った研究態度に由来するものだとと言えるのです。

佐藤先生と比べるようなかたちで何とも心苦しいのですが、かたや和道先生は、理論的な把握が希薄だと自覚しておられました。「わしゃ、方法論というよな難しい話はできん」と。でも、どこ

か均斉のとれない人間像、世界像に魅力を感じておられ、先生からなされる史実の提示は、斉一的な信心の価値観を問いつくすものとなっていたのでした。

牛乳など乳製品が受け付けられない先生に対し、宴会では皆がチーズを出さないようにしていました。そんな周囲に「教祖様も麦飯が嫌いじゃったからなあ」と言われます。食物に感謝をすることと嗜好は別、というわけです。そこには、何となくチグハグさがあり、またそれでいいとする、そんな信心の世界を喜んでおられた姿がありました。

「難しい話はできん」とされる先生の言葉は、一見、非力に聞こえますが、しかし、佐藤先生が倫理的に切り離れた「そのまま」の世界へ直通するものでしょう。「そのまま」の世界は、和道先生を研究に駆り立てた驚嘆を育んでいたものでした。歴史の中でたまたま一人の人間に教祖がいた。この事実への驚嘆です。その意味で、思弁では届かないリアリティーに迫る先生の研究には、「実証」という実践的介入の可能性や緊張感が生じることになっていったのです。

研究所がいろんな意味で大変だったときです。「実態を明らかにしても、なかなかそれが認知されないのは、何なんですかねえ」。お二人の先生に、そんな問

いかけをした記憶があります。返事は、さっぱり覚えていませんが、あらためてお二人の論文からは、こういう声が聞こえてくるようです。

佐藤先生からは、生きた「擬態」の言葉が。「その格闘において、教学が可能なんだよ」。

和道先生からは、「そのまま」の言葉が。「まあ何でも続けさせていただけば、それでええ」。

(出石教団)

ここからのねがい

事務長・資料室長 三好光一



私が研究所に入所したとき、佐藤光俊先生、金光和道先生は共に部長の職に就かれていた。

入所間もない頃から、佐藤先生とは、教団史資料整理で月に六日ほど一緒に資料整理をさせて頂いた。当時は、戦前期の目録作成に取り組んでおり、私も一つの項目を受け持ち、崩し字と悪戦苦闘した。当然読めないしタイトルを付ける能

力もなく足手まといで、一緒に読んでもらった後はタイトルをメモ用紙に書いてもらっていた。一人の先生に集中すると申し訳ないと思ひ巡回するのだが、佐藤先生のメモは厄介だった。すらすら書かれた文字は私にとつては崩し字にしか見えなかったからだ。そのメモを解説するのも時間を要し、先生に再度尋ねることも多々ありご迷惑をかけた。

佐藤先生は釣りがお好きであった。「沙美の岩に赤いペンキでSと書いてあるのは、わしの岩や」と仰っていた。研修旅行にも釣り道具を持参されており、宿泊所から海に向かわれていたようである。ある年、海岸線沿いで休憩になった際にも竿を出しておられ、その僅かな時間でも見事釣果をあげられていた。翌年主査になり、コース別の自由行動を設け、輛の浦で釣りを堪能して頂き、周防大島の年には、「一緒にさせて頂いて手解きを受けた」。

佐藤先生の研究報告は、頑張つて読もうとしても難しい熟語のオンパレードで睡魔を誘うアイテムでしかなかった。また、会話も同じで「佐藤先生は漢字で喋るから話が難しい」と触れ回っていたことも思い返されるが、ここ数年、資料編纂の業務で教団史の明治期の資料に触れていることから、佐藤先生の論文を読ま

せて頂いている。自分が立てた仮説を佐藤先生はどのように思われるだろうか、お見舞いに伺った際に尋ねようとしたのだが、色々話し込み次の機会にと言葉を飲んだ。別れ際に先生の手を取って「また来ます」と申し上げたが、かなわぬ事となった。やつと先生と教学らしき会話が出来るものと思っていたのに心残りである。

○ 和道先生は、入所時の資料室担当部長であられ、直属の部長だった。

○ 研究生講座の資料解説も担当されており、資料室員も参加して小野家資料の「物成帳」の解説を行った。資料室員にとつては実践向きの講座である上に楽しかった。後年、資料解説講座は先生から引き継いで担当させて頂いている。また、資料の補修では御祈念帳の裏打ちを一緒にさせて頂いたこともあった。調査はもとより、資料取扱いについてのスペシャリストであり、私の師匠である。

○ 入所して間も無い頃、資料の複写に際して「白紙の頁も必要な資料だ」ということを言われたことがある。原型保存の必要性を言われたのことと思ってきた。

○ 近年資料編纂で、ある帳面を取り扱った際、複写本では判読しがたく原本を見ることが多かった。原本には複写本にはない

空白頁が所々にあり、追記が出来るように配慮された跡が見えた。この空白頁の存在如何は、帳面の性格を変えるものとなり、自分の仮説を大きく左右した。この時「白紙の頁も必要な資料だ」と仰ったのは、管理面だけでなく、研究面でも大切なことだと実感でき、資料管理への思いを新たにさせられた。

○

○ 佐藤先生、和道先生から教わったことは無数にあるのだが、その本意が酌み取れているかは怪しい。しかし、御用を進める中に両先生から教わったことは生きており、これからも時々気付かせて下さるに違いない。私には、佐藤先生は黒衣姿で本部境内を、和道先生はご自宅と図書館の道中をそれぞれに歩かれており、いまだにその場に行けばお会い出来るような気がしてならない。何か迷うことがあればそこへ行き尋ねることにしようと思う。ということで、佐藤先生、和道先生、これからもご指導どうぞよろしくお願いいたします。

(上宇和教文)

SAKAMICHI

前号で願いとしておりました、佐藤光俊先生、金光和道先生の追悼号を、この

度、無事発行することが出来ました。

○ 所外から玉稿をお寄せ頂きました先生方には、限られた紙数にも拘わりませずご執筆頂きましたこと、厚く御礼を申し上げます。

○ 編集にあたって、皆様の原稿を拝読いたしておりますと、それぞれの情景が目につかび、目頭を熱く致しました。そうした先生お一人お一人の思い出を共有させて頂けますことは、真に有難い事と存じます。

○ 以下、ここにエピソードを紹介し、記憶を記録にしておきたいと思えます。

○

○ 佐藤光俊先生は、木工もお得意であられました。今も所内に逸品が残っております。一つは新聞受け。これが設置されるまでは、玄関のスノコの上に四紙が放置されていたので、強風時には広告が飛散しておりました。もう一つは、事務室のプリンター用ラックです。おかげで机上の作業スペースが確保されました。この二つは、私が知る限りのものであります。日常で活用されているものの中には、まだまだお手製のものがあ



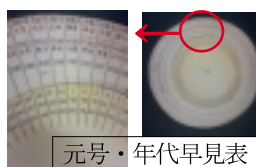
○ また、研究所退任の際には、客殿に遮光カーテンを逃して下さいました。資料の

日焼けを懸念されたことと拝察し、資料を大切にとの御思いを感じさせて頂きます。

○

○ 金光和道先生も色々なものを器用にお作りでありました。よく耳かきで背中をかく先生が居られました。その方の退任時には竹で作った孫の手を贈られました。既製品かと思紛うほどの出来栄でありました。

○ 早川先生が記しておられます「元号・年代早見表」は、講座の中で作成しておられた時期もありましたが、今ではその存在を知る職員も少なくなりました。現存するものを見本に作成してみるのも良いかと思わせて頂きます。



○ 両先生がお作りになった品々からは、「お役に立つ」「人が助かる」という願いを感じさせて頂くことが出来ます。

○ その様な「もの」を作ることは出来なくとも、その御思いは受け継ぎ、後々へ伝えていきたいものと思わせて頂いております。

②

発行・印刷 金光教学研究研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一之三

電話 (〇八六五) 四二一三一一七

FAX (〇八六五) 四二一三一一九